

2019年度教員による授業相互参観実施状況報告書(FD推進センターホームページ掲載内容)

| 学部名 | 公開科目数 | 実施科目数 | 本年度の報告【まとめ】(実施方法・効果など) | 次年度への課題 |
|------|---|---|---|---|
| 法学部 | 【法律学科】全専門科目 【政治学科】専任教員全科目 【国際政治学科】専任教員全科目 | 【法律学科】いくつかの授業について参観希望があったものの、時間等の調整ができず、実施するには至らなかった。 【政治学科】4科目 【国際政治学科】3科目 | <p>【法律学科】2018年度までは、初年次教育を担当する教員の科目などを中心に計9つの公開科目を選定して実施してきたが、今年度においては、授業参観制度の促進を図る観点から、授業参観の対象科目をすべての専門科目に拡大した。</p> <p>【政治学科】「公共政策フィールドワーク」および「現代政治学特講Ⅰ(千代田区)・Ⅱ(沖縄県)」については、本年度も複数の専任教員が担当し、受講者の事前学習やフィールドワークの成果の報告にたいして、それぞれの教員がコメントをした。それにより、担当教員間で、学習課題について互いの知見、考察・分析手法、教授法を知ることができた。「公共政策フィールドワーク」と「現代政治学特講Ⅱ」は、大学を離れての現地調査授業であるため、教員は受講生のフィールドワークに付き添いながら、頻りに意見交換を行った。「現代政治学特講Ⅱ」では成果報告書を作成し、担当教員がそこに総合評価を記載しており、これについては政治学科の教員全員が目を通すことができる。</p> <p>【国際政治学科】国際政治学科の一年生が全員履修する「国際政治への案内」は、本年度も複数の専任教員が担当し、これから国際政治を学ぶにあつて様々な学問的なアプローチがあることを講義した。そのうち、CISの政治と外交について講義では、ソ連崩壊後に徐々に経済成長を遂げていく2000年代のロシアについて解説する際に、当時の貴重な写真やDVD教材を活用して、冷戦崩壊後の社会の混乱を知らない学生にも記憶に残るよう工夫をされていた。また、「外交総合講座」では、実務家やジャーナリストなどの有識者を招くり、講義に先立って、外交とは何かという根源的問題を学生に考えさせていた。「Hosei Oxford Programme (HOP)」研修の渡航前に行う事前授業では、オックスフォードへの渡航学生と、セブへの渡航学生に対して、担当教員二名がそれぞれの研修先の政治経済社会情勢について講義を行うとともに、有意義に研修を行うための基礎的な知識を学生に伝えた。</p> | <p>【法律学科】参観希望を申し出た教員が確実に参加するよう促す方策を検討する必要がある。</p> <p>【政治学科】一年生向けの「政治学入門演習」(8クラス開講)では、以前受講者の合同報告会を開催し、各クラスの学習成果をすべての教員が共有していたが、その準備にあまりにも時間を取られ、通常の演習に支障を来すため、現在は行っていない。今後は、テキストの選択や授業の進め方等について、学科会議以外にも懇談会等を設け、一層の相互理解を深めていく。</p> <p>【国際政治学科】国際政治学科の初年度教育をさらに充実させるために、必修科目のテキストの選択や授業の進め方等などについて教員間で情報交換を行う場を設けたい。また、学習の定着を促すためにも、少人数制で行っている実践科目や演習についても相互参観も進めたい。</p> |
| 文学部 | 68科目 | 9科目 | <p>例年通り、5月に公開科目を一覧表にして、専任教員に配布した。</p> <p>授業相互参観が実施されたのは9科目、参観者は18名であった(昨年度は実施4科目、参観者13名)。学期中は教員が授業や各種学務で多忙を極めており、参観日時の調整も困難で、参観実施が難しいとの声がある中、昨年度から実施科目・参観者とも増加したことは一定の成果であった。あわせて、FDミーティング等を通じた情報共有や意見交換が活発になされており(実施回数35回、別途メーリングリストでも実施)、学生の状況把握や授業方法の改善、課題共有、意見交換などの面で効果を上げている。特に英文学科では、科研費プログラムを立ち上げて学科教育の向上に務めていることは特筆される。</p> | <p>【哲学科】 ・FDミーティング等でみられた成果を生かし、教員間で授業相互参観の実現にも努める。</p> <p>【日本文学科】 ・2021年度にカリキュラム改革を行う予定があり、そのための検討会(FDミーティング)の開催を随時図っていく。</p> <p>【英文学科】 ・文学研究の志望を増やすために、どのような言葉で、そしてどのような場で、文学教育の理念と目標(文学教育はどのような能力を養成するか)を学生に伝えるか、さらなる検討を進める。 ・文学の授業に映画を使用することの意味とそのための方法を集中的に検討する教材化をふくめ、より具体的に検討していく。 ・文献の適切な引用方法のより確実な指導方法を模索する。</p> <p>【史学科】 ・引き続きミーティング等で学生の状況について情報共有に努めたい。</p> <p>【地理学科】 ・ゼミ時間が限られているため、ゼミ後のミーティングに割く時間が十分に確保できなかった。別に時間を設定するなど工夫が必要である。</p> <p>【心理学科】 ・次年度も担当教員間の情報共有や意見交換の取り組みを継続する予定である。</p> <p>【文学部共通科目】 ・引き続き教員の参観を促し、その意見を講義の設定・運用に活用したい。</p> |
| 経済学部 | 72科目 | 8科目 | <p>(1)実施方法 ①公開方法 経済学部専任教員は各担当科目のうち原則1科目は授業相互参観科目とする。 ②参観方法 経済学部所属教員は、所定の期間内にあらかじめ参観申込をしたうえで授業参観することとする。 ③公開期間 2019年6月24日(月)～6月27日(木)</p> <p>(2)授業実施者へのフィードバック等 参観申込み者には、執行部まで①授業担当者に対する感想、②授業相互参観制度に関する意見・感想の提出を依頼した。①授業担当者に対する感想については、授業担当者本人にフィードバックを行った。</p> | <p>(1)公開科目数に対して実施科目数が少なかったため、実施時期直前の周知を工夫し、実施期間の延長等を検討し、実施科目数を増やし、経済学部の教育力の向上を図ることが今後の課題である。</p> <p>(2)兼任講師を含めた授業参観の対応については、今後、検討していきたい。</p> |

| 学部名 | 公開科目数 | 実施科目数 | 本年度の報告【まとめ】(実施方法・効果など) | 次年度への課題 |
|------|--|-------|--|---|
| 社会学部 | 全開講科目 | 45科目 | <p>①オムニバス型の授業での実施(5科目) 教員間で、授業の方法や内容に関する打合せを行っている。参加した教員にとって、今後の授業運営の参考となっている。</p> <p>②本学部ゲスト講師制度を利用した外部講師を招いての授業をととした実施(39科目) 外部講師を招聘し、その授業を参観するだけでなく、外部講師との意見交換を行った。授業方法や内容に関して、刺激を受けることができた。</p> <p>③専任教員担当の授業に別の専任教員をゲスト講師として招く形での実施(1科目) 教員2人にそれぞれ1回ずつ別のテーマで話をしてもらい、担当教員とゲスト教員と学生たちとで議論した。学生たちから活発な質問と意見が続き、時間が足りなかった。</p> | <p>授業相互参観を含めた教員間の交流を通して、授業の方法・内容のさらなる改善を図ることを促す。 また、ゲスト講師制度を利用した授業等の情報の集約・事前の周知は現在も実施しているが、次年度以降も教授会等の場を通して、奨励を強化する。</p> |
| 経営学部 | 原則として専任・兼任・兼任教員による講義授業とし、演習等の小規模授業は除く。ただし、公開するかどうかは各教員の自由に委ねた。 | 11 | <p>①実施方法 今年度の経営学部では、創設60周年を記念して「講義リレーでつなぐ『実践知』フォーラム」と称する全11回の連続公開講義を開催した。今年度の相互参観は、それぞれの公開講義に対し、執行部教員およびモニター担当学生を派遣する形で実施した。各講義は、法政大学憲章「自由を生き抜く実践知」に関するコンテンツをテーマとし、教員有志が企画する形で行われた。それぞれの授業の1コマ分を用い、ゲスト招聘講義やゼミ形式など、様々な形態を組み合わせつつ、幅広いテーマで講義が展開された。参観後、モニター学生は授業記録・感想を作成した上で参観教員(執行部)へ伝達し、執行部はその内容をふまえた上で「報告書」という形にまとめ、担当教員へフィードバックした。</p> <p>②効果 教員目線のみならず、学生の意見をふまえたフィードバックを行うことで、授業運営の改善につなげることができた。特に今回は、一般社会にも広く公開され、法政大学憲章をメイン・テーマとするシリーズ講義を参観対象としたため、①他者の目線をより意識していた、②自らの授業内容と法政大学憲章との関係性についても深く考察されていた、など、授業内容にも大きな改善が見られた。</p> | <p>・昨年度に比べ、実施件数は増加したものの(2018年度5件)、公開講座を参観対象としたため、いわゆる「普段の授業」「普段のゼミ」についてのフィードバックは得られなかった。 ・今後は、経営学部で実施している学生面談、FDアンケートなど、他の取り組みとの連携を図ることで、学部教育への理解をより一層深めていきたい。</p> |

| 学部名 | 公開科目数 | 実施科目数 | 本年度の報告【まとめ】(実施方法・効果など) | 次年度への課題 |
|--------|--|---|--|---|
| 国際文化学部 | 専任教員が担当する全科目 | 33科目(春学期23科目、秋学期10科目)。ただし、同一科目名で曜日・時限の異なるものは複数科目とした。参観教員数は11名(春学期9名、秋学期2名)。内、春学期参観教員2名は2科目を参観。また、この他に合同ゼミを実施した教員2名。 | 春学期、秋学期ともに、教員から「参観をすすめる授業の科目名・曜日時限・教室・公開時期」を募ったのち、オファーのあった科目をリストにして教授会で共有し、相互授業参観をよびかけた。また、「参観をすすめる授業」リストにはない科目においても、教員間で個別に連絡をとり合い、授業を参観する事例も見られた。授業を参観した教員からは、例年通り、授業運営における具体的なヒント(アクティブラーニングの運営方法など)が得られた、自分の授業を振り返り、考えることができた、など極めてポジティブな回答が複数寄せられた。また、他の教員の専門分野の話を生徒の目線で聴けるのは貴重な機会だと思う、特に学部専門科目に関して、教員同士で授業を相互参観することで、分野を超えて授業間の関係が見えてくるという実感を持った、などという感想もあり、授業運営の参考になるというだけではなく、授業相互参観の利点も見えてきた。 その他、授業相互参観の延長線上にあるものとして合同ゼミの開催という取り組みも報告され、国際文化学部における教育、そしてFDの積極的な取り組みとして評価できるのではないだろうか。 | ここ数年の参観教員数は、2015年度9名、2016年度19名、2017年度13名、2018年度6名、今年度11名と推移している。これを減少傾向ととるのか、横ばいととるのかは難しいところだが、今年度は教員の参観をすすめる授業が33科目あったのに対し、参観教員数が11名というのは、参観教員数の観点からはやはり少なすぎるように思われる。「専任教員は少なくとも2年間で最低一回、他の教員の授業を参観することを目指す」という2014年度3月3日開催の教授会で決定された目標達成には、まだほど遠いと言えよう。この一因としては、教員が日々の業務に追われ、授業相互参観自体を失念していることがあるように思われる。参観を促すメールを授業相互参観実施期間中に複数回送付するなど、FD委員会としての細かい配慮が必要かもしれない。 また、参観教員数が伸びない理由には、教員一人ひとりの意識の問題があるのかもしれない。とすれば、2014年度3月3日教授会での決定を各教員が再確認する必要があるのではないだろうか。 |
| 人間環境学部 | 全科目 | 8科目 | 本学部では1年生を対象に「人間環境学への招待」という授業を春学期に行っており、5つのコースごとにそれぞれ2名程度の教員が各自の専門性を踏まえた講義を行っている(合計21名)。講義はそれぞれが独立した内容で行った場合もあれば、一つのテーマに沿ってディスカッション形式で行った授業もあり、相互に参観しつつ授業を行うことでお互いの講義手法を理解し、その後の各人の授業に活かすことができた。 また、フィールドスタディという現地学習が国内外で20コース(2019年度)あり、その中で複数教員が担当するコースが8コースあった。異なった専門領域の教員が協力して参加することで、学問領域を超えた教授方法の工夫などを理解することができた。 上記二つの科目はFDの一つである授業相互参観の目的を果たしていると考えられる。 今年度はこれらに加えて、新任教員3名を含む6名6科目において授業相互参観を実施した。実施科目として1年生の必修科目である基礎演習を中心に、研究会、コース基幹科目で行った結果、プログラム、進行プロセス、指導方法、アクティブラーニング、その他授業手法全般などにおいて相互に得るものがあり、自身の授業に取り入れる等の意義を見出すことができた。 | 今年度の成果を踏まえて、引き続き初年次教育、研究会、コース関連科目などを対象とした相互参観を計画し、可能な範囲で実施する。 |
| 現代福祉学部 | 現代福祉学部専任教員の担当科目(ただし、演習・実習科目、情報・調査系科目、言語コミュニケーション科目、その他、担当教員が公開を希望しない科目を除く) | 8科目 | 春学期(6月24日～7月13日)および秋学期(11月18日～12月23日)に実施した。次に挙げるような、授業における様々な工夫について学びを得た。 ・授業の冒頭に「本日の講義の目的」を示して、そのテーマに対して関心を持つような工夫がされている。また、授業の途中には「ここまでをまとめておくと」のシートも示し、前半の講義内容に対して確認を促している。授業の最後には「講義のまとめ」のシートで要点を整理している。 ・パワーポイントのスライド資料を用いて学生が主体的に発表できる機会が設けられており、発表内容について活発な意見交換が行われていた。 ・授業の感想をSNS(ツイッター)で投稿してもらい、その投稿を講師のプレゼンテーションとは別のパソコンで紹介しており、双方向の臨場感溢れる講義になっていた。 ・事例検討とアクティブラーニングを組み合わせ、学生の興味関心と理解を高める工夫がなされていた。 | 授業相互参観の重要性については、学部でも理解が得られ定着してきている。しかし今年度は実施科目数の減少がみられ、より積極的な活用には至らなかった。今後は、教授会における効果的な周知を行い、より積極的な活用へと繋げていきたい。 |
| 情報科学部 | 全科目 | 3 | 今年度は教員の自主的な参観のみが行われた。科目数は3となっているが、件数は20件以上にのぼった。参観の目的は2つに大別された。1) 同一科目を複数名で実施している科目での情報共有 2) 前提科目との情報共有 1)では同一科目の異なる教育方法を学び、より効果的な教育方法について議論ができた。 | 自主的な実施では、参観者や目的に偏りが生じてしまうという問題がある。現行カリキュラムが完成年度を迎えたため、カリキュラムのPDCAサイクルのCとして授業参観の役割を整理し、組織的に取り組むための計画を策定するなどして、授業参観の結果を明示的に活用することが望まれる。 |

| 学部名 | 公開科目数 | 実施科目数 | 本年度の報告【まとめ】(実施方法・効果など) | 次年度への課題 |
|---------|---|----------------------------------|--|--|
| デザイン工学部 | 【建築学科】16科目 【都市環境デザイン工学科】学科主催の全科目(他学科学生との混成クラスを除く) 【システムデザイン学科】5科目 | 28科目 | <p>【建築学科】1年次から4年次に至る全てのデザインスタジオ科目をはじめとし、卒業研究・卒業設計において、全クラス合同の講評会を行い、兼任を含む教員が相互に他の科目やクラスの内容について理解し議論できるようにしている。さらには、公開の講評会により学内外に対して学習成果を公開し、特に学外からの評価を受ける機会を設けている。加えて、スタジオ科目、フィールドワークおよび修士設計、卒業設計での優秀作品と、卒業研究の梗概を、それぞれ学科発行誌「法政大学スタジオワークス」、「建築研究」に掲載することで達成状況を共有している。また、年度末には、全スタジオ(デザインスタジオ1～11、造形スタジオ、構法スタジオ、デジタルスタジオ)の専任・兼任教員が一堂に会し、相互参観の感想を基本とした設計教育の振り返りと、新年度方針について討議する機会を設けている。一方、各授業での活用資料や学生の学習成果はもれなくサーバーに蓄積されており、これを学生の自習のため、あるいは教員の授業改善また相互参観のための参考資料として閲覧できる仕組みを設けている。</p> <p>【都市環境デザイン工学科】毎年授業のビデオ撮影を実施している。今年度は1年生科目のうち、必修科目で実施することを確認した。撮影したデータをDVDとし、教員に配布するとともに、アクセス可能なJABEE室のPCに保管し、当該教員および他の教員も視聴できるようにした。</p> <p>【システムデザイン学科】全教員が参加し学生の指導にあたる、PBLを基本とした必修授業を開講している。学生の作品制作過程において、中間プロセス、試作、成果発表パネル展示、最終作品プレゼンテーションの各段階で、フィードバック・アドバイス、講評を全教員で行う機会を設けている。また、各段階での成果に対し教員同士が意見、情報交換を行うことで、相互チェックを行っている。このように、全員の教員が授業全体の進行を把握しつつ学生の生み出す結果に対して意見交換を行い、責任を持つ仕組みを持つ指導体制となっている。</p> | 【システムデザイン学科】各教員の専門性による評価軸の相違は、世界の多様性を反映した結果であり、教育上貴重な情報だと考える。反面、学生にとっては様々な角度からの意見を同時に咀嚼する事の困難さも感じられる。意見・評価の伝え方などを工夫し、学生にわかり易く伝えることを来年度以降の課題とする。 |
| 理工学部 | 650 | 48科目 | <p>1.実施時期 主に2019年度秋学期 2.実施方法 以下の2通りを実施した。</p> <p>a)個別授業相互参観 ・専任教員は、全ての担当科目を原則として、期間内授業相互参観可能な科目とする。 ・専任教員は、担当教員に連絡の上、所定期間内は自由に授業参観をすることができる。ただし、授業運営の支障とならないように、特に配慮する。 ・相互参観希望者は、科目担当教員と事前に、科目、曜日、希望参観時間(15分～90分 任意)を調整し、教室内等で参観する。 ・参観した専任教員は、参観報告書(委員会提出用及び担当教員提出用)を記入し、各学科担当委員及び科目担当教員に、個別に提出する。 ・実施期間内に各学科の専任教員数の1/3以上の教員の参観を原則とする。</p> <p>b)学科に特化した柔軟な運用による公開(学科別) ・学科別にa)とは別の形式で、学科独自の柔軟な運用を含む授業相互参観について検討・実施する(例 PBL、実験・演習、複数教員担当形式授業、研究室配属説明会、卒業・修士論文中間発表会を用いたプレゼンテーション能力の検討等)。</p> | <ul style="list-style-type: none"> ・授業相互参観の実施率の向上及び個別の授業参観報告書のフィードバック方法の検討 ・客観的な授業改善に関するチェックを簡易的に行えるシステムの検討(報告書含む) ・兼任講師を含めた、全授業における授業相互参観を継続 ・参観授業数を増やすこと |
| 生命科学部 | 春学期 95 秋学期 88 | 春学期 29(参観回数31) 秋学期 22(参観回数22) | 生命科学部では、今年度、春学期(6月10日～7月6日)と秋学期(11月11日～12月7日)の2回、法政大学の全教職員向けに授業公開を実施した。授業進度の異なる部分を参観してほしいという積極的な意見を反映し、今年度は春学期の公開の時期を例年よりも1週間遅くして実施した。公開科目数は昨年度とほぼ同数であった。授業参観者アンケート自由コメント欄に、学生とのコミュニケーションについて、とても参考になったという意見が散見された。また、過少受講者科目の授業参観により、スリム化への対処方法を検討する上で参考になった例もあった。 | 参観者の数が昨年度に比べて春学期は増加したが秋学期は横這いであった。相互参観が定着しているものの、一方でマンネリ化を指摘する声もあった。来年度に向けて、これまで参加していなかった教員に参加してもらった新たな方策が必要である。 |

| 学部名 | 公開科目数 | 実施科目数 | 本年度の報告【まとめ】(実施方法・効果など) | 次年度への課題 |
|----------------|---|---------------------------|---|--|
| グローバル教養学部 | 11 (春7 秋4) | 11 (春7 秋4) | 専任教員が、各自の専門分野に関わらず、新規採用された兼任教員の科目を中心に、合計11科目の授業を各学期の後半に参観した。授業の進め方、内容、レベルが学部のカリキュラムポリシーに合っているかどうかを確認することができた。授業後や後日該当教員にフィードバックをし、必要に応じて面談を行った。また、報告書を教授会ポータルで共有した上に、FDワークショップ(春学期は7月10日、秋学期は11月20日)を開いて、参観の結果を教授会メンバー全員に口頭で報告した。報告内容に加え、アクティブラーニングのやり方やアセスメント、補講についても議論をした。このように、授業相互参観は、全体的に高い質の授業を、さらにレベルアップする効果があった。 | 今年度と同様のスケジュールと手順で授業参観を実施する。2020年度導入の新カリキュラムに関わる新規科目や新規採用教員を中心に参観を行う予定である。なお2019年度から過少受講者科目の取り扱いルールの運用を開始したため、受講者が10名以下の科目にも目を配りたい。 |
| スポーツ健康学部 | 全科目 | 18科目 | 教授会で授業相互参観を呼びかけたところ、春学期と秋学期でそれぞれ13科目、5科目という結果であった。今年度はゲスト講師を招聘した場合や複数教員が担当するオムニバス科目の場合は特に参観の対象としてほしいと依頼したところ、昨年(9科目)よりも倍増した。 | 秋学期の実施科目数が春学期よりも少ないため、1年をとおして教員に呼びかける必要がある。 |
| 市ヶ谷リベラルアーツセンター | 全科目 | 14科目 | 内部質保証活動の項目として、 1.授業相互参観(従来参加型) 2.授業参観による研修(新任教員対象) 3.セルフ授業参観(ビデオ記録) 4.教員相互授業情報交換会 の4パターンに分類して実施した。その内容を市ヶ谷リベラルアーツセンター独自フォーマットにて報告を行い、年度末に開催した内部質保証委員会で共有し、一定の効果が認められた。「FD授業参観実施結果報告」フォーラムの個別コメントから得られた知見、また先駆的な取り組みなどは次年度のILAC運営委員会において内容を共有する予定である。 | 次年度以降も上述4つの形式によるFD活動を継承・推進させていくとともに、授業の方法・学生の反応・アクティブラーニングその他に関する授業運営の工夫などについて、授業の質の向上を相互に図るための仕組みづくりを構築したい。 また、質保証の観点に基づき2020年度から導入する大人数授業科目の受講者数適正化(抽選)の検証をする予定である。 |
| 小金井リベラルアーツセンター | 専任教員が担当する全科目・および兼任講師が担当する一部科目 合計 約130科目(理工学部主催約100科目、生命科学部主催約30科目) | 理工学部主催:2科目 生命科学部主催:9科目 | 1.実施時期 春学期・秋学期授業実施期間 2.実施方法 個別授業相互参観を基本とした。 ・専任教員は全ての担当科目を原則公開とし、期間内に授業相互参観可能な日程を設定する。兼任教員については期間内での相互参観の可否を伺い、可能な場合には日程を設定していただく。 ・理工学部は、専任教員が、授業担当教員に連絡の上所定期間内に自由に授業参観をすることができる。生命科学部は、事務が各科目につき公開可能な日程をまとめ、全学の教職員にホームページ上で公開する。 ・相互参観希望者は、科目、曜日、希望参観時間(15分～100分・任意)を事前調整し、教室等内等で参観する。 ・参観した専任教員は、必ず参観報告書を記入し提出する。 | ・授業相互参観実施率の向上のための方策を引き続き検討する。 ・KLAC関連科目について、現在の理工学部・生命科学部の授業公開制度の中で、効率的に授業参観を実施する方法を検討する。 |